

「膵臓外科の実際」

神戸大学教授・外科 齋 藤 洋 一 編集
 久留米大学教授・外科 中 山 和 道
 帝京大学教授・外科 高 田 忠 敬

仙台赤十字病院長・東北大学名誉教授

佐 藤 寿 雄

このたび、齋藤洋一教授、中山和道教授、および高田忠敬教授の編著による「膵臓外科の実際」が刊行された。齋藤、中山両氏はお若いと思っていたら、既に外科学会の指導的立場にあり、高田氏は春秋に富む俊才である。いずれも気力充実し、溢れるばかりの情熱の持ち主であられる。その思考し、行動するところは常にユニークであり、異彩を放っている。本書にもその華麗な演出ぶりの一端がうかがわれる。

手術書の常として解剖と生理は必要であろうが、本書では、それこそ外科医に必要な範囲で簡潔に要領よくまとめられている。その中に「膵臓と臓器相関」があるが、特に「臓器相関からみた術後障害」は新しい観点からのものであり、それが「臓器相関からみた消化管の機能的再建」を導き出している。QOL が叫ばれている今日、外科医には説得力のある項目であろう。

「膵臓疾患における概念と規約の解説」も本書の特徴の1つと言えよう。急性膵炎の重症度判定の基準は古来論争の多かった問題であるが、今日までの諸家の見解に解説を加えながら、厚生省研究班でまとめられ

た判定基準が提示されている。現段階での見解がよくまとめられていると言ってよいであろう。一時、混乱がみられ、大きな話題となった粘液産生膵癌も最近の知見を紹介しながら、無難に整理されている。また、「膵管癒合不全、膵・胆管合流異常」も極めて鮮明な写真と共に要領よくまとめられている。

「膵疾患のチェックアップと鑑別」では、「US では広く病変を拾いあげ、かつ無駄なく二次的精検の適応を選択することが肝要であるので、第一線で診断に当たる臨床家は習熟し、理解しておく必要がある」として、特にUS診断の重要性が指摘されている。「膵悪性腫瘍進展度の画像診断」では美しい写真と共に進展度診断の有効性と限界について記されている。当代内科一流の専門家だけあって、切れ味の鋭い説得力のある記述である。

次に注目したいのは「外科的治療を必要とする膵疾患の治療方針」である。従来の成績では手術法の項目で適応の中に含まれているのが多い。本書では特性あるいは病態に基づいた治療方針としてまとめられている。特に若い外科医にとっては有

力な指針となるものであろう。

もう1つの特徴は、手術法の項で、各手術法ごとに「適応と術式の位置づけ」、「術式の実際」に続いて「手術法の要点とコメント」を設けていることである。これは前記の治療方針の項と一部重複するのはやむを得ないが、最後に要点とコメントとして念を押すように pitfall などを含めてまとめている。最後の膵癌の集学的治療や蛋白分解酵素阻害薬の項と共にまことに緻密な配慮が行き届いたものと言いたい。

執筆者には内科を含めて現在第一線で活躍中で、しかも実績のあるその道の権威を当て、配役の妙を示している。ミスキャストのないドラマに失敗はない。素晴らしい手術書ができあがったものである。敢えて「膵臓外科のすべて」の書名を挙げたい思いである。膵臓外科医のみでなく、広く消化器外科医に座右の書として、ぜひお勧めしたいものである。

● B5 516頁 図275 写真115
 1993 定価 26,780円(税込) 〒500

医学書院 刊(☎ 03-3817-5657)